

日本の遠洋航路を通じてみた日本と世界

兵庫県 私立高等学校教諭

はじめに

本稿は『図説日本史通覧』（以下『通覧』）を活用して、19世紀末から20世紀初頭にかけての日本と世界各地の間で展開される人や物の流れを概観し、さまざまな歴史的事象がどのように関連しているかを意識させる授業展開例を紹介するものである。

19世紀末から20世紀初頭にかけて日本郵船会社は世界各地に遠洋航路を開設する。この遠洋航路の船舶を通じて多くの人や物が移動し、日本や世界各国の経済・社会に大きな影響を与え、またそうした経済や社会の変化が遠洋航路を通じた人や物の流れに影響を及ぼしていく。こうした相互関連的な動きのなかには日本と各国間の外交課題となるものもみられる。この授業では日本郵船が開設した海外遠洋航路を概観し、人や物の流れが日本の社会に、また諸外国の社会にどのような影響を与えたかを考察させる。さらに第一次世界大戦とそれに伴って日本で起こった大戦景気が遠洋航路に与えた影響についてもみる。さらに大戦景気に伴って中国に進出した在華紡を素材として、進出の背景と中国社会に与えた影響についても考察する。そして最後に19世紀末から20世紀初頭にかけて起こったこうした動きと、現代における問題の共通点・相違点について比較・考察させる。

1. 日本郵船による遠洋航路の開設

はじめに『通覧』p.18の1910～20年代における巻頭東アジア全図を見て、日本郵船のおもな航路についてみる。さらに『通覧』p.236の⑩「明治に開かれた定期航路」を参照させて、インドのボンベイ（ムンバイ）とオーストラリアのメルボルン、北米シアトルに航路がのびていることを確認する。ほかにロンドンに向けてのヨーロッパ航路、南米ブラジル航路などがあつたことも紹介する。

次に教科書に日本郵船の遠洋航路開設の記述があるのでそれを確認させる。

・ボンベイ航路・シアトル航路が開設されたのはなぜか

ボンベイ航路は1893（明治26）年に日本郵船によって開設されたことを教科書で確認する。国内の綿紡績業の発展を背景に、原料となるインド産綿花を運ぶために航路が開設されたことに触れる。また政府が航海奨励法によって遠洋航路の就航に奨励金を交付して援助したことにも触れておく。

次に教科書で1896年に日本郵船によってアメリカ航路が開設されたことを確認する。

アメリカ航路は横浜－シアトル間に開設されたことを紹介し、『通覧』p.18の地図で確認する。これはアメリカのグレートノーザン鉄道の依頼により、大陸横断鉄道を通じてニューヨークなどアメリカ東海岸の諸都市をつなぎ、この航路を通じて生糸の輸出をはかろうとしたことについても触れる（このルートの方が従来のサンフランシスコ経由よりニューヨークまでの所要日数が短縮できた）。『通覧』p.19の「19世紀後半～20世紀初頭の世界」にアメリカ大陸横断鉄道が記されており、シアトルの位置は示されていないが、シアトルから東海岸に向けてのルートが記されているので、これを確認させる。またこの航路を通じてアメリカ産綿花が日本に向けて送られていることにも触れておく。

・こうした遠洋航路による綿花の輸入と、日本国内における蒸気機関・輸入機械を用いた大規模綿紡績業の発展によって、日本の綿糸生産が急増し、日本においても産業革命が進展したことを教科書で確認させる。

2. 第一次大戦の勃発

・第一次世界大戦の勃発は日本の海運業・造船業にどのような影響を及ぼしたのか

第一次大戦が勃発すると世界的な船舶の不足によって日本の船舶による輸送が急速に拡大し、日

本が世界第3位の海運国に成長したことを教科書で確認する。運賃も急激に上昇して(雑貨1トンにつきヨーロッパ航路・オーストラリア航路が8倍、アメリカ航路が10倍など)汽船会社は巨額の利益を上げた。このころ日本郵船も大幅な増資を行って経営規模を拡大し、このほか大阪商船や東洋汽船などの従来の汽船会社に加え、内田汽船などの汽船会社が急増したこと、いわゆる「船成金」が数多く現われたことにも触れておく。また商船不足におちいったイギリス海運会社の要請で、日本郵船の船舶がイギリスのリバプールに寄港するようになったことを紹介する。

こうした海運の急速な拡大のなかで、大戦景気にわくアメリカへの生糸、アジアへの綿織物の輸出が進んだことを教科書および『通覧』p.250の④「貿易額の推移」などで確認させる。アメリカへは生糸のほかフィリピン産の砂糖、マンガン鉱などニューヨーク向けへの貨物が増大し、1914年のパナマ運河開通を機に1916年に横浜-ニューヨーク直航便が設けられたこと、その結果横浜-ニューヨーク間の運航が36日から28日に短縮されたことを紹介し、『通覧』p.19「19世紀後半～20世紀初頭の世界」の図でパナマ運河の位置を確認する。

また『通覧』p.18で日本各地や中国沿岸に造船業が発展していることを確認させ、日本の造船業が世界的な水準に達していることも触れておく。

■ 中国への在華紡の進出

・日本の紡績会社が中国に進出していったのはなぜか

『通覧』p.18の下にある「在華紡」のコラムを見て、大戦景気による国内賃金の上昇、工場法の施行による生産力低下の不安などから日本の紡績会社が上海や青島に進出し、いわゆる在華紡を形成したことを読ませて、同ページの地図で中国に織維工場(紡績工場)が存在していることを確認させる。在華紡の進出は日本式経営によって中国の紡績会社を圧倒したこともコラムの記述で確認させる(ただし、五・三〇事件とそれを契機とする反日感情の高まりについては今回のテーマからは外れるので別の機会にまわしておく)。

3. 遠洋航路と移民

■ 遠洋航路の開設と移民

・メルボルン・南米航路の開設はどのような背景のもとに行われたのか

メルボルン航路の開設は1896(明治29)年であるが、当初オーストラリアへの移民の輸送を一つの目的としていたことを紹介する(このときの移民事業そのものはオーストラリア政府による制限によって進まなかったことにも触れておく)。

次に『通覧』p.233の特集「日本人の海外移民」を見て、日本人の海外移民の歴史について触れる。

明治維新直後から日本からハワイなどへの移民が始まり、1880年代以降オーストラリア、アメリカ、ブラジルなどへの移民が進んでいったことを紹介する。日本郵船のシアトル航路や大阪商船のタコマ航路にも多くの移民が乗船し、シアトルやタコマには日本人町が形成されたことも紹介する。

一方1916年に日本郵船によって開設された南米東岸航路は、1912年に東洋移民会社との間で締結されたブラジル行き移民輸送契約にもとづき開設されたもので、南米への移民輸送を主目的として開設されたことを紹介する。このほか大阪商船や東洋汽船が開設した南米航路によってもブラジルなどに移民が渡っていったことも紹介する。そしてそれが日本政府による人口増加・貧困問題の解決をめざす国策であったことを『通覧』p.233 ②[B]「国策としての南米移民」で確認する。

■ アメリカとの摩擦

次にこうした日本人移民の渡航が現地社会、とくにアメリカとの摩擦を生んだことについて考察させる。

・日本人をはじめ、東洋人のアメリカへの移民は現地社会にどのような影響を及ぼしたのか

19世紀後半に始まるアメリカへの日本人移民は19世紀末以降に入ると増大し、サンフランシスコなど太平洋岸に移民が集中するようになった。こうした動きに対し20世紀に入ると現地において日本人に対する反発が強まる。まず教科書に掲

載されている1906(明治39)年のサンフランシスコ学童排斥問題(同年のサンフランシスコ大地震を契機としている)を確認させ、その後1913年のカリフォルニア州排日土地法の成立や1924年の排日移民法など、アメリカにおける排日気運の高まりがあったことを意識させる。

次になぜこのような日本人移民に対する反発が高まったかについて考えさせる。まず日本人移民の問題が起こる以前、1880年代にはすでに中国人移民労働者に対する反発が高まり、中国人移民の制限がはかられていたことを紹介する(1882年の10年間中国人移民を禁止する排斥法の成立、その20年後の中国人移民全面禁止など)。そこでは過酷な労働もいとわず、白人労働者より安い賃金で働く中国人労働者に対する反発が起こり、そこにアメリカ社会にある人種差別感情が結びついて排斥運動が展開されたことを理解させる。そして中国人移民が排斥されたあとに同じアジア系である日本人移民が増大すると、今度は日本人に対する反発が強まったことを理解させる。それは同じ頃アメリカへの移住が進んでいた韓国人に対しても同様な動きがあったことも紹介する(そうした差別的な感情は日本人を含め、有色人種一般に及ぶものであったことは意識させておく)。低賃金労働のほかに現地のコミュニティとこうしたアジア系移民との間の軋轢についても触れておく。

以上のことをふまえたうえで、1919年に開かれたパリ講和会議において、日本が国際連盟規約に人種差別撤廃条項を加えることを提案したことを教科書で確認させ、日本側が提案した背景の一つにアメリカにおける日本人移民排斥があったことを理解させる。

4. 現代との関連

最後に、以上学習したことをふまえ、こうした問題と現代の状況との比較を考察させる。

ワークシート 解答

1. ア 例) 国内で発展する綿紡績業の原料となるインド産綿花の輸入をはかるためにボンベイ航路を、また日本産生糸の輸出やアメリカ産綿花の輸入をはかることを目的にシアトル航路が開設された。その結果、輸入綿花を用いた綿紡績業が急速に発展し、日本における産業革命が進展した。
2. ア 例) 世界的な船舶の不足を背景に輸送量が増大し、運賃の急激な上昇によって汽船会社が大きな利益を上げた。
イ 例) 大戦景気による国内労働者の賃金上昇などによって日本の紡績会社が中国に工場を建設するようになり、「在華紡」とよばれた。
3. ア 例) 日本人移民は当初ハワイなどへの移民に始まり、遠洋航路を通じてオーストラリア、アメリカ、南米ブラジルなどに進出していったが、アメリカでは日本人移民に対する反発からこれを排斥しようとする動きがあった。
4. 4については教室で生徒のみなさんがグループでいろいろ出し合ってみてください。



- 1910～20年代の在華紡の進出、移民問題は現代とどのようにつながっているだろうか

■ 在華紡の進出と1980年代後半に始まる日本企業のアジア進出

経済産業省によると、2006年現在の日本企業が保有する海外現地法人約3600社のうち、1986年から2000年に設立されたものが70%を占めており、とりわけアジアに設立されたものが大半である。経済産業省は「1985年の『プラザ合意』後の急速な円高によって生産コストの低い海外への工場移転が急激に進められたことなどがその一因にあげられる」と指摘している。こうした状況と第一次大戦期の在華紡の進出を比較させ、共通する点、相違点を考えさせる。

■ 19世紀末から20世紀初頭のアメリカへの移民と現代の状況

19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカへの日本人移民と、移民排斥の動きをふまえ、戦後の移民問題、とりわけ1950年代からのドイツへの移民問題、日本への移民、シリア難民問題などを比較させ、共通する点、相違点を考えさせる。

5. おわりに

今回は19世紀末から20世紀初頭にかけて、日本を中心とする人や物の流れを、日本の海運業を素材に見てきた。人類の歴史のなかで、それぞれの時代にそれぞれの地域で特有の人や物の流れがある。こうした人や物の流れを通じて見ると、各地域の政治や社会・文化にまた違った側面が見え、また現代の社会にさまざまな姿を投影している。今回の考察を通じて生徒たちに各時代の歴史像を総体的にとらえ、歴史を通じて現代社会を見る目を養ってもらいたい。

【参考文献】日本経営史研究所「日本郵船株式会社百年史」(日本郵船、1988年)ほか

ワークシート

1. 19世紀末から20世紀初頭にかけての日本の遠洋航路について考えてみよう。

ア 日本郵船がインドのボンベイ航路，アメリカのシアトル航路を開設した背景，また各航路の開設が日本に与えた影響について考えてみよう。

2. 第一次世界大戦が日本の経済・社会に与えた影響について考えてみよう。

ア 第一次世界大戦の勃発が日本の遠洋航路に与えた影響について考えてみよう。

イ 大戦景気が国内の産業構造に及ぼした影響について一つあげてみよう。

3. 遠洋航路を通じた人の流れについて考えてみよう。

ア 遠洋航路を通じて日本人移民がどのような地域に展開し，いかなる影響を及ぼしたかについて考えてみよう。

4. 現代との関連について考えてみよう。

ア 中国への在華紡の進出と同じような動きが現代にあったかどうか，また在華紡の進出との共通点・相違点について考えてみよう。

イ 20世紀初頭のアメリカにおける日本人移民排斥問題と，戦後のドイツへの移民，日本の移民労働者，シリア難民問題などの共通点・相違点について考えてみよう。